

## 第12章 メキシコにおけるメディア・リテラシー教育

江原 裕美\*

### 1. はじめに

メキシコシティ（連邦区）は人口870万人、隣接するメキシコ州の17市を含めると人口1638万人（1995年現在）の巨大都市圏を形成しており<sup>(1)</sup>、教育の課題も多岐にわたるが、その一つであるメディア・リテラシー教育において1996年頃から活発な動きがあり、他のラテンアメリカ諸国からも注目を集めている<sup>(2)</sup>。

メキシコでは日本の「ピカチュウ」が子どもの人気を集め、いろいろなグッズが売られており、「ドラゴンボール」「キャプテン翼」なども人気がある。「ポケモン現象」（日本のアニメーション番組を見ていた子どもたちが多数突然倒れた事件）は、世界的に大きな反響を呼んだが、メキシコでも教育関係者にはよく知られている。このようにメディアに対する関心は高まっており、特に、多様なメディアに接する機会が多い都市の子どもに関して、メディアと教育の関係をどのようにつくり上げるべきかが重要な問題となり、メキシコシティ（これ以後、メキシコシティという場合は連邦区を指す）では具体的なプログラムが開始された。

本稿では、メキシコにおけるメディア教育政策とメキシコシティにおけるメディア・リテラシー教育の取り組みを紹介する。

### 2. 国・地方におけるメディア・リテラシー教育の取り組み

#### (1) 情報教育一般

1993年7月13日に公布された一般教育法の第VII章第III節は「コミュニケーション・メディアについて」と題し、この節唯一の条文、第74条において「マス・コミュニケーション・メディアはその活動を発展させるに際し、第8条で定められた基準に従い、第7条に規定された諸目的の実現に貢献するものとする」と規定している。

また、連邦政府の『1995—2000年度教育発展計画』では、約9ページを割いて電子メディアを教育の発展に役立てることを目的の一つと表明している。その概要は以下の通りである。

#### 『1995—2000年度教育発展計画』86—95頁、「教育支援のための電子メディア」概要

まず、視聴覚教材、遠隔教育、コンピューター教育を3大電子メディアとし、これらは組み合わされて教育の質の向上と、遠隔地への教育拡充の重要な手段となりうると述べる。教育はそれを受ける機会を保障するだけでなく、生涯教育の観点から学生が学校にとどまり勉学を修了することの価値を広める必要があり、メディアはその点でも学校教育を補完したり代替したりする選択肢の一つとなりうる。

基礎教育レベルでは、メディアは「テレセクンダリア（後述）」のように遠隔教育に使われ

\* 帝京大学法学部

る場合と、教室でのビデオ、テレビ、コンピューター使用など教師の教育活動の補助として使われる場合という2つの使用法がある。前者は2000年度までに1994—1995年度比50%増を計画している<sup>(3)</sup>。後者のためにはビデオ教材製作と大部分の学校にビデオデッキの準備を目指し、特に農村地域を優先する。同レベルの情報学分野では、すでに1985年から1992年にかけて「基礎教育におけるコンピューター化」というプロジェクトが実施され、16000校、138,500人の教師が参加し、26750台のコンピューターが配布された<sup>(4)</sup>。コンピューターは視聴覚教材に比べ高価であり、減価償却も早いためコストと利益を慎重に計算する必要がある。また、広範な普及のためには、教師自身がこれを習得する必要がある、教員養成学校、教師の研修センターなどで、これらについて知り、その有効性を評価し応用することができるよう、体制を整えることが優先的課題となる。

第33条で規定しているように、権利としての教育を実現するため遠隔教育を発展させる必要がある。電子メディアを用いた遠隔教育は特別な事情のある集団に対して柔軟で効果的な方法での教育を可能にするが、いろいろな方法を用いて、これに参加する人々とシステム側との双方向性を確保することが重要である。

成人のために中学校レベルの教育を行うプロジェクトが進行中であるが、働く人々の状況に合わせたプログラムが必要である。基礎教育の内容に加え、成人に有用な内容も盛り込んでいくことで知識と経験を結びつけることができるようにする。これらはまた正規の教育課程の修了認定や労働能力資格などの取得を可能にする。また、遠隔教育プログラムが移動労働者、中でも国境を越えたメキシコ人労働者にも利用されるよう考慮する。

地域社会と学校を結ぶ手段として、電子メディアを活用する。子どもの価値観育成のために家庭に支援をする必要がある。Edusat（後述）で放送される番組を父母向けに学校で午後や週末に放映し、福祉の向上に役立てる。大人向けに特別番組を作って、年少者がテレビ番組を鵜呑みにしないで批判的に見る能力を身につけることができるよう、指導できるようにする。図書館に電子メディアの機器や視聴覚教材を備える。電子メディアの使用拡大のために総合的な調査研究、Edusat ネットワークの拡大、民間テレビ放送の参加、教科書やガイドブックの作成、教育プロセス支援のためのコンピュータ使用などを進める。

以上のような計画に基づき、具体的に進められている代表的プログラムとしては、①衛星教育テレビ網（Red Edusat）、②学校教育情報通信網（Red Escolar）、③テレビ中学校（テレセクンダリア）がある。

①はテレビ電波発信システムと学校に備え付けられた受信機網の名称である。メキシコ全国をカバーし、中米及び米国南部まで到達しなお拡大途上である（2000年の加入校数は2000校の僻地小学校を含み、35000校に達する予定である<sup>(5)</sup>）。6チャンネルを有し、教員の資質向上や教授方法の刷新、成人教育への支援などを主な目的として、教育番組を放送している。ラテンアメリカ教育コミュニケーション研究所（ILCE）と教育テレビユニティ（UTE）が協力している。1999年終わりまでに33,500台の受信機がメキシコ全体で設置され、これに対し99年度中4000時間以上の教育番組を制作、25000時間にわたって放送された。また2ヶ月ごとにEdusat使用のためのガイドブックが35000冊配布されている。

制作されている番組には、父母、幼児、若者、成人、先住民、障害を持つ人々などに向けたテレビ番組、先生の知識の革新のための番組、主に成人用の英語教育番組などがあり、これらの膨大な蓄積を活用するためのビデオ・ライブラリーが学校や教師の研修センターに作られつつある<sup>(6)</sup>。

②は学校におけるインターネット活用プロジェクトで、1996—1997年に144校、720台で実験

プロジェクトを開始し、1999年度途中では2200校9000台に拡大している<sup>(7)</sup>（2000年のうちには、2,300校の中学校、700校の小学校を新たに加え、合計で6000校以上となる予定である<sup>(8)</sup>）。教育におけるコンピューター利用は学校教育の重要課題とされる落第、留年、それらをもたらす学力不足の解決手段、同時に教員の現職研修や知識の現代化の手段として期待される。

現時点では、コンピューターの普及と情報リテラシーにはまだ大きな不足があるとの指摘がある。1995年に発表された国立統計機関の調査によると、1993年度において、都市人口のわずか5.6%しか、コンピューターを用いることができず、また都市家庭8,385,151家庭のうち、コンピューター所有家庭は3%であった。先進諸国と比べて、若年層のコンピューター使用者及び、女性のコンピューター使用者の割合が低いことも明らかとなった<sup>(9)</sup>。しかし、1995年以降の拡大は特に商業において急速であり、今後の発展に大きな期待がかけられている。

③は僻地に対し、就学前教育から初等、中等教育までを提供する目的で1968年に作られた公共の遠隔教育サービスである。主に2,500人以下の小集落において、学校に備えた受信機でEdusatの番組を受信し、印刷教材も併用して教師の指導を受けつつ勉強する<sup>(10)</sup>。

## (2) メディア・リテラシー教育—教師対象—

### ① 背景と特徴

情報教育一般でなく、メディア・リテラシー教育としての実践が近年メキシコシティ内の学校で行われるようになってきている。それらの実践を後押ししているのが、連邦特別区（メキシコ・シティ）における教員研修プログラムとこれに合わせて作られた教師用のテキストである。

このメディアリテラシー教員研修は、メキシコで唯一のユニークなプログラムである。それが生まれたのは、メキシコ・シティーという大都市としての性格と関係がある。近代化された大都市に住む子どもたちは、テレビをはじめ、商業広告、新聞、ラジオ、雑誌、各種印刷物、インターネットその他あらゆるメディアにさらされている。その中で市民レベルの活動からはメディアの規制ないしは検閲を求める声が出てきた。しかしそれは教育行政の分野では解決しがたい問題であったため、まず教師に研修を施して、教室において生徒をメディアに親しませ、メディアに対して選択的な態度を育成する方向を取ることとなった<sup>(11)</sup>。

それゆえにメキシコ・シティのメディア教育の特徴は第一に、有害映像などに規制を加える方向ではなく、また一方的にメディアに対して批判的な子どもを育てることでもなく、種々のメディアに対して非常に開かれた態度で臨み、積極的に活用し発信する実践によってメディアの言語を読み解くプロセスの中で、メディアを見分け分析する批判的意識・態度を育てるという点である。第二に、最も一般的なメディアであるテレビだけでなく、ラジオ、漫画などあらゆるメディアを対象とし、同時に親への教育も視野に入れた総合的实践を目指している点である<sup>(12)</sup>。

### ② 実施主体

連邦特別区教育庁教育支援課（Dirección de Soporte Educativo, Subsecretaría de Servicios Educativos para el Distrito Federal）が、理論研究及びプログラム編成を行って、教員研修を1996年度から実施、現在は親への教育も行っている。別名「メディア・リテラシー教育課」と呼ばれるこの課はメディア教育関係の中心となっており、総勢約90名を数える。年間予算は約800万ペソである。96年から1999年度までの3年間で、就学前教育段階から中学校段階までの教師25000名がメディア・リテラシー教育の研修コースを受講した。研修費用としては一人あたりわずか35ペソでまかなうことができているという<sup>(13)</sup>。



メディア・リテラシー教育は以下に示すように、主に4つの活動分野がある。

- a) 調査 (1996—1997年度の調査, また他の調査)
- b) 研修 (1996年度以降の教員研修プログラム)
- c) 普及 (教科書の作成)
- d) 適用 (各学校において教科書を手段としながら教師が省察的活動の促進者となる)<sup>64)</sup>

現段階では調査を一応終了し、教科書も作成されているので、広く研修を実施している。その研修を受けた教師たちが、勤務校で実践を始めつつある局面だといえるであろう。

### ③ 理論的前提

メキシコのメディア・リテラシー教育では、教育とメディアを結びつける見方について大別して以下の二つがあると理解されている。

- (1) 思想的な一種の吹き込みにより批判的な読みとり、聴取の力をつけ、メディアの悪影響からの視聴者の防衛を目的とする努力。
- (2) メディアとその教材を活用することにより、教室内の教授—学習という伝統的プロセスを拡大、教育的効率を増大する努力<sup>65)</sup>。

これらは、ともに教育に今まで存在しなかった要素を付け加えるという立場に立っており、教育制度や教授方法の大きな変革を求めることはない。それゆえ、批判的教授学に基づく体系的な分析が不足しているのではないかと考えられる<sup>66)</sup>。

メディアはその表象 (representación) の力を通して現実を「認証する」(certificar), すなわち「真実」を新たに創り出す働きを持つ。教育は教師、生徒、父母たちに「作り出された真実」をうち破ることを可能にするスキームを提案しなくてはならないのである。学校は認知能力の強化を通じて、社会が全体として、すなわちあらゆる人々が「見て、読んで、聞く新方法」を駆使できるようにし、同時に個人がエンパワーメントによって自らの表現を作り出す技能の獲得を可能にしていくことが望まれる<sup>67)</sup>。

その際、学校とメディアの間にある子どもを取り巻く以下の側面を特に考慮すべきであると考えられている。

#### a) 情報の過多

教師は生徒が情報の洪水の中で自己を見失わないような手立てを示す必要がある。

#### b) 多様なメディアに対して持つ習慣・慣習

人は印刷されたものを見聞きしたものよりも重視する。視聴覚を通じて提供される情報は娯楽・怠惰と結び付けられて考えられがちである。

#### c) 教師の育成

メッセージを解説したり、異なる方法でのコミュニケーションモデルを教えられることがない現在、伝統的な教育モデルを変革する必要性が生じている。

#### d) 新しいテクノロジー

新しいテクノロジーは文化的「産業」にますます強く結び付けられており、その導入は教育的装いをもちながらも製品の売り込みに他ならないことがある。

#### e) 学校文化と文化産業の連携<sup>68)</sup>

学校文化は印刷媒体、ラジオ、音楽、テレビといった文化産業に対し、一連の偏見を持っている。メディアの提供する娯楽とメディアに対する批判をどのように子どもに育てていけるのか、どのように二つの世界は連携できるのか？

これを要約するならば、新しいテクノロジーを敵視することなく、注意しながら導入し、メ

ディアのメッセージを解読するだけでなくメディアを通じてのコミュニケーションを体験しつつ学び、膨大な情報から必要なものを選択することができるようにするという方向性が示されていると理解できる。

#### ④ メディア・リテラシー教育のモデル

先の「メディア・リテラシー教育課」では、メキシコにおける実践例（1987年に行われたシミトリオ・ラミレス・エルナンデス小学校6年生によるラジオ番組とテレビ番組づくり）と世界各地の実践に関する文献資料を参照し、メキシコの小学校の現状から手持ちのメディアを使って生徒自身の創造性を生かす方法が模索された。このプロセスで『メディア・リテラシー教育：批判的見方の育成（Programa de Educación para los Medios, PEM と略称）』と題する4冊の本が書かれた。これらは小学校5、6年生担当の教員向けに、生徒に対しマスコミュニケーションの独自性を教え、教授—コミュニケーションのダイナミックな関係を引き出す方法を提供することを目的としている<sup>99</sup>。メディア・リテラシー教育は以下のプロセスで構成される。

##### 1. 「民主主義的实践」

垂直的コミュニケーションから水平的コミュニケーションへと移り変わるコミュニケーションプロセスを知り、それを行い、自分のものとする。

##### 2. 「視聴覚コミュニケーションの識字化プロセス」

独特の言葉、技術的問題などそれぞれのメディアの独自性を学ぶ。

##### 3. 「社会化プロセス」

書いたり、口頭で伝えたり、まねしたり、絵を描いたりなどの実践によりメッセージを作ったり壊したりする中で創造とコミュニケーションのダイナミクスに参加する。チーム、集団、学校内で行うことで社会性を身につける。

##### 4. 「メディアの適用またはエンパワーメント」

学校生活の中でそれぞれのメディアの理論を適用する。アイデアを練ったり計画を構想するプロセスがエンパワーメントとなる。実際のメディア機器は必要としない。

##### 5. 「批判的見方」

上記4段階を達成したらメディアのメッセージを批判的に分析する<sup>100</sup>。

#### ⑤ メディア・リテラシー教育の教員研修

1996年にメディア・リテラシー教育の効果をプレ実験したところ、きわめてよい成果が出たばかりでなく、対象学年の生徒以外の学年でも適用できることがわかった。教師、父母、校長、三者が生徒のコミュニケーション、課題の実行、学校への態度、自尊心においてよい変化を認めた。パイロット段階として位置づけられていたにもかかわらず、61校、152人の教師、4354人の生徒の参加があった<sup>101</sup>。

教員研修は3日間の導入コースのあと、毎週1日、約7週間にわたって研修を受けるコースがある。導入コースのプログラムは表1のようになっている<sup>102</sup>。

筆者は国立教育大学（旧国立師範学校）で2000年2月19日に行われた、連邦特別区教育支援課主催教員研修コース「メディア・リテラシー教育：批判的見方の育成」の第一日目の午前部を見学した。まず、表の第一番目のメニュー、メディア・リテラシー教育とは何かを理解するための、全体講義では、講堂全体をマルチメディア的舞台設定として、様々なメディアを駆使して、子どもが取り巻かれているメディア環境の変化、それについていけない大人との理解

表12-1 教員研修の導入コース

月曜日	火曜日	水曜日
メディア・リテラシー教育とは何か？どのように批判的見方を育てるか？	PEMに関する心理—教育学的考察	気のあったグループによるラジオ—テレビ番組作成
コミュニケーション・プロセス グループ活動・演習 「感じる、思う、欲する」	同継続	同継続
休憩	休憩	休憩
適正な教育テクノロジーの導入	マス・コミュニケーションの特徴。 グループ活動・演習 「ここに何かある」	マス・コミュニケーションの公共性
		PEM教科書の贈呈
希望者への助言	希望者への助言	コース修了式・懇親会 (オープン参加)

出典) *Educación*, no.51, p.27より。

の格差を受講者に伝え、メディアの読み解きの必要性が説かれる。

続いて、20人程度の小さいグループに分かれ、各部屋でコミュニケーション・プロセスをゲームによって体験する。それに続き、コミュニケーション・プロセスの理論を導入から学んでいく。このとき特徴的なのは、パワーポイントなどを使った情報技術によるプレゼンテーションを駆使することではない。それよりも、まさにファシリテーターとしての講師と問題意識を持つ受講者の間での問いかけや応答、聞いていた他の受講者からの発言や質問など、非常に活発な対話的方法が用いられている点である。それは筆者には、意識化と考え発現する力の育成を導く、パウロ・フレイレが提唱した対話による方法を彷彿とさせるものに思われた。

参加者に聞くと、この研修コースの評判がよいので、誘い合って来た人や、以前に参加したかももう一度やって来た、などという人々がいた。自費で来ている先生たちも多いとのことであった。3カ年でのべ2万5000人の受講者とのメディア・リテラシー教育課情報であったが、それを裏付けるような参加者の熱気が感じられるものであった。

### 3. 学校・大学におけるメディア・リテラシー教育の取り組み

#### (1) メディア・リテラシー教育の位置づけ

以下は、実施主体である教育支援課でのインタビューからの要約である。

「メキシコのメディア教育は特定科目として行うのではなく、教え方自体を変える。どのメディアがよい悪いというのではなく、『メディアとその内容に教育的意味を与えることができる』という点から出発している。

これまでの研究では、子どもを『受身的な受信者』とのみ考える傾向があるが、本当は人間は経験や家庭、文化、性格などいろいろな文脈の中にある。本実践の立場では、影響がメディア問題の唯一のものとは考えない。むしろ、最初は、メディアに近づきよく知ることから始める。

なぜなら、学校文化とメディアの間には大きな隔りがある。子どもは教師や父母より歌手やタレントから大きく影響を受けている。そうしたメディアの言葉を我々は知らないでいる。

ゆえに、イメージや内容を読みとるだけでなく、メディアが動くダイナミクス、プロセス、手続きなどを理解することに努める。それが理解されると、自分の視点から教育的意味を引き出すことができるようになる。『メディアの言語』を読みとるだけでなく、マスターすることで、商業的メディアからでもそのメッセージを捉え、新たな教育的意味を付与できるようになると考えている。

学校では一人の教師が変わっても、大多数の教師は伝統的なやり方を変えない。それでは革新的実践を行う教師がいなくなると、その実践は終わってしまう。学校がその伝統的スタイルを変えない限り、テクノロジーをいくら入れても何も変わらないと考えられる。学校の中で教師の教え方を革新し、コミュニケーションの方法を与えてから、テクノロジーを導入することがよい結果を生むだろう。まず学校では実践を行い、教師が次第に気づくプロセスから概念化を導く帰納的方法を提案している（2002年2月14日インタビュー、注(12)に同じ）。

## (2) メディア・リテラシーの授業実践

2002年2月17日、連邦特別区第45小学区の「サラ・マンサノ」小学校を見学した。1964年創立で、午前の部は生徒数333人、教員9人、他に非常勤教員が2名いる。同小学校は2部制になっているので、午後2時以降にまた同数くらいの生徒が通っている。午前の部の時間割は8:00-10:30、休憩30分をおいて11:00から12:30となっている。月から木曜日までミルクとパン、金曜はジュースのみの軽食を生徒に与えている。

メディア・リテラシー教育分野では、この学校では2台のビデオデッキを持っていて、そのための教材となるビデオを購入したいと考えている。Edusat ネットワークを受信するなど、メディアを使った教育を導入しようと努力している。印刷物としては新聞を取っており、それを毎午前に各クラスで分析するメディア・リテラシー教育の時間を設けている。筆者が訪れたとき、ちょうどその時間帯であった。

低学年においては、生徒はグループに分かれ、漫画を使用して、それを切り抜いてから自ら新たな物語を作る授業を行っていた。高学年では、新聞の言葉を調べたり、新聞ニュースの意味を学習したりする。さらに最高学年では、調べたことを絵や文にして長い紙に描き、それをテレビの形をした箱に通して、さながら横に場面が流れる紙芝居風の「テレビ番組」として発表するクラスもあった。その場合、マイクの模型を持った司会者を立てたりして、発表をメディア的に行うように工夫しており、生徒も楽しんで授業を行っているように見受けられた。

メディア・リテラシー教育の研修を受けた教員が、この分野の教育を体系的なカリキュラムとして実施するよう努めているということであった。教員によれば、生徒は学年のレベルに応じて学習するが、どの学年においても興味関心が高いという。また、生徒には表現力がつき、都市の中で生きていくのに必要な力をつけるのに役立っていると感じていると述べていた。

## (3) メディア・リテラシー教育の構成

「メディア・リテラシー教育のモデル」で提示したプロセスはテキストの中で具体化されている。テキストは3分冊となっていて、各分冊で扱われるテーマは以下の通りである。

### 第1巻 「メディアを用いて教育する」

#### テーマ1 「私たち自身を知ろう」

教師—生徒間のコミュニケーション強化がねらい。4レッスン構成。

#### テーマ2 「コミュニケーション」



コミュニケーションの複雑なプロセスを生徒に理解させる材料を提供する。5レッスン構成。

テーマ3 「マス・コミュニケーション」

マス・コミュニケーションの有用性を知り、受信者としての役割について分析する。6レッスン構成。

テーマ4 「印刷物：新聞と雑誌」

印刷媒体について知り、その伝達の性質を知る。4レッスン構成。

テーマ5 「印刷物：漫画」

メディアの言語使用、文字と描画のあり方を気づかせ、脚本やショット、枠取り、奥行きなどを理解させる準備とする。生徒の創造性を生かす。3レッスン構成。

テーマ6 「テレビゲームとゲーマー」

なぜテレビゲームが好きか、見つけださせる。暴力的内容については別に取り上げ考えさせる。4レッスン構成。

テーマ7 「メディアにおける公共性」

マスメディアの核心を学んだので、批判的な見方を適用させる。自分の生活とメディアで送られるメッセージとを対比・分析させる。3レッスン構成。

第2巻 「学校におけるラジオ」

テーマ ラジオ

ラジオの固有性を理解させる。テクノロジー、技術と言語（聴覚イメージ）、商業的ラジオ放送の例などを取り上げる。校内放送を行うための基本的要素を教える。

第3巻 「TV と学校：友か、そして／それとも、敵か？」

テーマ1 「テレビについて話そう」

テレビについてどれだけ知っているか？テレビの発展に関する意見の違いをださせてみる。テレビについて考えさせ、議論を深める。3レッスン構成。

テーマ2 「クラスにテレビを持ってきたのは誰？」

テレビが教室にあるとき、教師としての役割はどんなものか？3レッスン構成。

テーマ3 「教室で視聴覚教材をいかに使うか？」

視聴覚教材を教育に用いる際、教授プロセスで不可欠の要素を考える。決まった処方箋を与えるのではなく、教師自身が自分の方法を考えるよう奨励する。5レッスン構成。

テーマ4 「テレビと日常生活」

テレビ視聴をその前、途中、その後というプロセスとして分析し、私たちとテレビの関係について考える。2レッスン構成。

テーマ5 「視聴覚作品の制作」

批判的な見方の育成において、受信者としての役割のために失っていたコミュニケーション能力を取り戻し、教師と生徒が作品を作るための基本的情報を提供する。しかし、メディアの言語と論理を知ることが目的なので、作品の制作は選択肢の一つであり、必須ではない。6レッスン構成。

テーマ6 「テレビにおける公共性」

制作過程で、分析能力と公共的または非公共的メッセージの生成とを結びつける。



5 レッスン構成。

テーマ7 「テレビと教育」

テレビと教師との関係についての探求。1 レッスン構成<sup>23)</sup>。

以上のようにテキストは構成されているが、その順序や応用は教師の工夫に任されている。なお各レッスンは内容により、学習時間が異なる。1 例を参考資料として次頁に掲げる。

#### 4. おわりに—メディア・リテラシー教育の効果と問題点—

メキシコ唯一のメディア・リテラシー教育は、公的教育支援サービスの一つであり、特に宣伝をしているわけではなく全くの自由参加であるにもかかわらず、3年目で総計25,000人という多数の教師の参加を得た。これは、この問題への関心の高さを示すと同時に、研修プログラムの内容に高い評価が与えられているためと考えられる。

1996—1997年度に行われた追跡調査のうち、数量的調査からは、7つに大別できる意見が得られた。プログラムを続けるべきだ、学習を向上させる、実践後生徒や教室内に改善がもたらされた、カリキュラムが適切だ、認知能力が伸びた、教師自身の考え方の変化があった、生徒の家庭内で変化が起きた、というものであった<sup>24)</sup>。また、同調査の一環として教師に経験を要約してもらったところ、最も有意義な成果として、

- ① 生徒が自分自身でストーリー漫画を完成させた。(21.92%)
- ② メディア・リテラシー教育とオフィシャルに定められている教育内容とを統合できた。(20.19%)
- ③ 教師—父母—生徒の関係が緊密化した。(19.29%)
- ④ 生徒グループのまとまりがよくなった。(14.91%)
- ⑤ 生徒の遊びにおける創造性を目覚めさせることができた。(11.41%)

が挙げられた(調査数は未記載)。この他にもグループ学習の活発化(26.35%)、文章の書き方の向上(21.92%)、口頭発表力の向上(15.78%)という副次効果も言及されている<sup>25)</sup>。

このように、メディア・リテラシー教育の実践の結果としては、肯定的な評価が見られるが、調査結果の中では授業がテキスト通りの順番、方法を守る傾向があり、教師自身の工夫がまだ必要であること、教師の意識改革が実現されていない場合があること、なども示されている。教師自身の理解と技能の向上がきわめて重要であることが改めて強調される必要があるだろう。

メキシコ・シティの中でも教師が研修を受けた学校にほぼ限られている現状から察すると、メキシコ国内全体で見れば、このようにメディア・リテラシー教育が実践に移されている学校数はまだごく限られている。しかし、研修における教師の熱意はかなり高い。またパウロ・フレイレも関係していた、教育の改革に熱意を持つキリスト教系団体や教育関係者たちからのこの分野への関心と影響が強いことは研修における対話的方法の採用にも現れており、ラテンアメリカにおける草の根的な教育実践の生命力をこの分野が持ち始めていることは指摘できよう。

一方的知識詰め込み型としばしば批判されるラテンアメリカ諸国の学校教育の状況を考慮したとき、メディア・リテラシー教育には単なる技能ないしは生徒の注意を引きつけるための手段というような水準でなく、生徒と教師の関係を変え、生徒の独創性や発表力をつけ、メディア環境に生きる力を育むことを目指した、オルタナティブな教育への萌芽が見られる。ラテン

アメリカの民衆教育の伝統が生かされていく可能性もあり、さらに今後の展開を注目していきたい。

#### 参考資料 メディア・リテラシー教育の授業例

『「コレクション：メディア・リテラシー教育：批判的見方の育成」』

第1巻「テーマ5 印刷物：漫画」より第1レッスン pp.135-136

タイトル「漫画とは何？」

組織：個人及びグループ活動 120分

活動

\*教師は事前に所要時間を教え、例を示しながら漫画を構成する部分について教える。

\*生徒たちは用いる漫画を詳細に読んで観察する。教師は形態、せりふの位置、登場人物は誰でどんな人か、などに注意を向けさせる。

\*教師からの情報に沿って、各生徒は漫画を構成する部分を切り離す。それら部分をノートに貼り付け、「挿し絵」「吹き出し」「ビジュアル・メタファー」「擬音」「人物」「コマ割り」などと名前を示す。少なくとも10の異なる要素を抽出するようにさせる。

\*生徒は10から15の完全なコマを切り取り、せりふをのぞき要素別に切り取る。

\*グループをつくり、切り取った部分を組み合わせて、新しい漫画を作る。そのためにシナリオとせりふを考えなくてはならない。冗談っぽいものやばかげたものもあってよい。

\*生徒は擬音やビジュアル・メタファーを作り出す。

\*グループ同士で交換して読み合う。

注意（物語として発展させるテーマを選び出すとき、生徒はどのようなことに言及しているだろうか？）

#### <注>

(1) <http://www.jica.go.jp/ninkoku/mex/mexoutline.html> による2003年1月の情報。

(2) *VC: Educación para los Medios*, diciembre-marzo 1998-99, año 1, no.1. Subsecretaria de Servicios Educativos para el Distrito Federal, p.1. (雑誌, メキシコ市教育庁発行『メディア教育』創刊号)

(3) Poder Ejecutivo Federal, *Programa de desarrollo educativo 1995-2000*, 1996, SEP, p.89. (連邦政府『教育発展計画1995-2000』)

(4) *Ibid.*, p.90.

(5) *Programa del sector educativo para el año 2000*, SEP, 2000, p.52.

(6) *Pérfil de la educación en México*, SEP, 1999, pp.89-95.

(7) *Ibid.*

(8) *Programa del sector educativo para el año 2000*, SEP, 2000, p.52.

(9) Reyes Retana, Eduardo Télles y otros, *Estructuración de programas de educación abierta y a distancia en la formación y capacitación continua de profesionales ante la demanda del mundo globalizado*, 1998, pp.23-25.

(10) *Pérfil de la educación en México*, SEP, pp.94-95.

(11) 2000年2月15日, 特別連邦区教育庁教育次長ベンジャミン・ゴンサレス・ロアロ氏とのインタビューから。

(12) 2000年2月14日, 連邦特別区教育庁教育支援課 課長 アレハンドロ・ブラジミール・ペニャ・ラモス氏, 同補佐 フランク・ビベロス・バイエステロス氏とのインタビューから。

(13) 同上インタビューより。2002年3月時, 1ドルあたり約8.9ペソ。

(14) Alexandro Vladimir Peña Ramos, Frank Viveros Ballesteros, *Colección: Educación para los medios desarrollo de la visión crítica volumen I*, Subsecretaria de Servicios Educativos para el Distrito Federal, 1a. edición, 1997, 2a. edición, 1999, pp.6-15.

(15) *Educación: Revista del Consejo Nacional Técnico de la Educación*, junio 1997, no. 51, p.12.

(16) *Ibid.*

(17) *Ibid.*, pp.13-14.

(18) *Ibid.*, pp.15-17.

(19) *Ibid.*, pp.17-19.

(20) Alexandro Vladimir Peña Ramos, Frank Viveros Ballesteros, *Colección: Educación para los medios desarrollo de la visión crítica volumen I*, Subsecretaria de Servicios Educativos para el Distrito

Federal, 1a. edición, 1997, 2a. edición, 1999, p.14.

- (21) *Educación: Revista del Consejo Nacional Técnico de la Educación*, no. 51, p.25.
- (22) *Ibid.*, p.27.
- (23) Alexandro Vladimir Peña Ramos, Frank Viveros Ballesteros, *Colección: Educación para los medios desarrollo de la visión crítica Volumen I, II, III*. Subsecretaria de Servicios Educativos para el Distrito Federal, 1a. edición, 1997, 2a. edición, 1999.
- (24) Alexandro Vladimir Peña Ramos, “Programa de educación para los medios en la búsqueda del desarrollo de la visión crítica,” in *Educación*, no.54, diciembre de 1998, pp.85-86.
- (25) *Ibid.*, pp.93-96.